

日本思想史研究の課題としての漢字、漢文、訓読

中村 春作

1 あらためて論題となった漢字、漢文、訓読

昨春秋、中国、北京で開かれた「東アジアのなかの日本文学——訓読、翻案と翻訳（東亜中的日本文学・訓読、翻案と翻訳）」（二〇一二年十月、北京師範大学）と題するシンポジウムに参加する機会を得た。二日間にわたる会議内容は盛りだくさんでその内容もきわめて充実したものであったが、なかでも注目されたのは、報告内容のなかに従来の個別研究テーマに加えて、「東アジアにおける漢文訓読の起源と仏教漢訳の関係」「日本古典文学漢訳の〈前翻訳〉」「梁啓超の《和文漢読法》——訓読」と東アジア近代翻訳ネットワーク形成の一側面」といった、

通常の文学研究課題を超えた、そして個別研究領域を超えた題目が見受けられたことである（本シンポジウムの内容の一部は、すでに雑誌『日語学習与研究』二〇一二年第二期に、「訓読と東亜漢字文化圏」特集号として掲載されている）。ちなみに上記の報告のうち、最初のもものは、最近『漢文と東アジア——訓読の文化圏』（岩波新書、二〇一〇年）を上梓した金文京（当日はヴィザの関係で欠席、論文による報告）によるものである。これまで日本個別の特殊な話題でしかなかった訓読もふくめて、翻案、翻訳といった課題が、東アジアの言語文化理解の一つの有効な切り口として認知され始めたということなのかもしれない。訓読、翻案、翻訳というキーワードで日・中の文化が語られるということ自体、確かに目新しい出来事であった。

これとはまた別だが、今春参加の機会を得たインドネシア日本研究大会（二〇一二年三月、ボゴール市、バクアン大学の総合テーマは「多文化社会とグローバルゼーションの衝撃と地域の「知」というものであった。当日の多くの報告がその趣旨に必ずしも合致していたとはいえないにせよ、このように海外における日本研究の大会、シンポジウムにおいて、普遍的課題とともに日本思想、日本文学が語られるという事実は、私自身にとつてたいへん刺激的で新鮮な出来事であった。今日、日本の大学で日本思想史を学ぶ学生の多くが、海外からの留学生によって占められるようになって久しいが、私たち日本思想史研究者としても、内向きの思想史研究に止まらず、より広いテーブルの上に日本思想史をおいて語る事が、あらためて求められているということなのであろう。

ところで、最初の北京での会議に話を戻せば、このように漢文やその受容の在り方が、東アジア文化交流の理解につながる課題として語られるのは（『日語学習と研究』の特集題目は「訓読と東亜漢字文化圏」、特に近年に始まったことではない。記憶に新しいところでは、一九八〇年代の「儒教文化圏」論、そしてそれに惹起されたかたちでの「漢字文化圏」の議論が思い出される。しかしながら、近年の動きと当時のブームとが位相を大きく異にす

るものであることは明らかである。八〇年代の議論が、良くも悪くも、言語や思想の外部の、主として経済状況を主要因とするブームであったのに対し、近年のそれは、本質的に文化研究の方法論的内省に由来するものだからである。ちなみに、八〇年代の議論の代表としては、橋本萬太郎・鈴木孝夫・山田尚勇編『漢字民族の決断——漢字の未来に向けて』（大修館書店、一九八七年）、溝口雄三・富永健一・中嶋嶺雄・浜下武志編『漢字文化圏の歴史と未来』（大修館書店、一九九二年）などが挙げられる。一九九〇年四月に創刊された雑誌『しにか』の第一回特集は、「漢字文化圏を考える——いま、なぜ漢字か？」であった。そして、これらの議論の背景に常に存したのは、近代化、「アジア四小龍」など高度経済成長の文化的要因、といったことがらであった。それゆえ、アジアの通貨危機、日本経済の失調と大陸中国の経済的台頭とともに、議論がまたたく間に鎮静化していったのは当然といえは当然のなりゆきであった。また、近代日本の言語学者に長く続く、いわば漢字派、反漢字派の議論がそれからまっていたため、議論が正しくかみ合わないまま終息してしまつた側面もあるように思われる。

それから約二十年、八〇年代の漢字、漢文をめぐる議論から今日の議論に至る過程には、いくつか、思想史に

おける方法論的転換の場面が存してきた。大きな文化・思想研究の視点（方法）の転換に応じて、言語に関わる問題が思想史の重要課題として登場し、そのなかで、日本における漢字、漢文、訓読などにも新たな照明が当てられるようになり、そこから再度、東アジアにおける「知」の形成を語る、共有の問題領域が求められるようになってきたからである。以下、その経緯を概観し、今後、さらに議論を展開させるための資としたい。

2 国民国家論、近代批判の中の言語論、あるいは漢字、漢文論

一九〇年代半ばから二十世紀初頭にかけて、文化研究において大きなインパクトを有したのは、近代批判、国民国家論、ポストコロニアリズムの思想潮流である。B・アンダーソン『想像の共同体』（日本語訳初版は、一九八七年）やE・ホブズボウム『創られた伝統』（日本語訳初版は、一九九二年）に刺激を受けるようにして、言語研究、思想研究においても新局面が出現し、そのなかで初めて、真の意味での漢字、漢文に対する「思想史」研究も出現した。国語、日本語の問題も、近代の「知」の制度の中に囲い込まれたものとして、それを解剖的に明らかにするという視点から論じられ、多くの傾聴すべき議

論が生み出された。また、「近代Ⅱ国民国家」批判の一連の流れの中で、植民地下における言語編制、教育から逆に「国語」「日本語」の本質を振り返るという問題権成も隆盛を迎えた。『帝国日本の言語編制』（世織書房、一九九七年）に始まる安田敏朗による諸研究や、植民地下台湾における日本語教育を新たな視点から解明した陳培豊『同化』の同床異夢——日本統治下台湾の国語教育史再考』（三三社、二〇〇一年）などがその代表である。

そしてそうした、制度としての言語への関心の中で、日本における「漢字・漢文」のありようもまた、近代日本の「知」の制度を構成した一つの要素として、問い直されることとなった。長志珠絵『近代日本と国語ナショナリズム』（吉川弘文館、一九九八年）は、創造されたものとしての「国語」を明らかにする過程で、明治期以降のいわゆる「国語国字論争」に照明を当て、それが同時に「漢文」をいかに排斥する運動と連動していたかを明らかにした。そして近代日本の知識人において、漢字・漢文がいかに、いわば躰きの石として機能したか、そして漢字・漢文が、どう排除／日本化されていったかを、具体的に明らかにした。

国民国家における近代国家語形成の観点から、近代東アジアにおける国家語と近代前アジアの普遍語Ⅱ漢字と

の関係に焦点を当てた論集も出現した。村田雄二郎、C・ラマール編『漢字圏の近代——ことばと国家』（東京大学出版会、二〇〇五年）である。同書「序」において、編者村田雄二郎は、一見自明に見える「特定のことばが特定の集団（国家や民族）の集合意識（アイデンティティ）を構成するという前提」を問い直し、近代に東アジア諸

国家がいかに国家語を立ち上げていったかを対照的に明らかにする必要性を説き、「近年の研究は」それぞれの国語については、ナシヨナリズム批判という観点から、とくに日本において多くの研究成果が生まれてきた。本書はそれを広く東アジア漢字圏という時空の広がりの中に解き放つ試みである」と述べている。同書は近代中国から、客家語、ベトナム語、朝鮮語に視野を広げ、個々の地域における近代国家における自国語意識の形成を、自国語と漢字との相関、相克の諸相から明らかにしようとしている。ここで提示される「東アジア漢字圏」ということばは、論者の価値意識（近代意識）の反映としてあった、八〇年代の議論とは異なり、あくまでも近代国家語の多様な成り立ちを解明するための、方法的な枠組みであったと言えるだろう。それは前に触れた金文京が近年提唱する「東アジア漢文化圏」という枠組みにおいても同様である。何らかの実体としての固定された漢

字・漢文化（実体としての「中国」）を前提に想定するのではなく、東アジアにおいて形成され続けた運動として「漢字文化」や「漢文化」をとらえ、その流動の諸相を把握するために、仮に名付けられた方法的枠組みとでも言えるだろうか。

言うまでもないが、国民国家論や近代批判は、何かが「発見」されたり、「隠蔽」が暴露されたり、「古典」があちらでもこちらでも「創造」されたり、といった安易な結論にばかり収束すべきものではない。近代における「再創造」「再構成」過程の種々相の精密な解析を通じて、自らの「内なる課題」として、文化形成のありように肉薄する「方法」として有効なものであるべきだろう。その点で、この時期、近代批判の文脈上になされた漢字・漢文論のなかで特筆すべき成果は、子安宣邦「漢字論——不可避の他者」（岩波書店、二〇〇三年）である。本書は「漢字」を「日本語」ととつての「不可避の他者」として規定し、『古事記』における和語表出の様相から、近代日本における「国語」成立の過程まで、内省的分析を加えている。子安は、そもそも「漢語」「漢文」とは何を以て言い出され、概念として成立したかという地点から問い始める。本書は、近代国語学の成立過程で漢字・漢文の所在がいかに難題となったか、そして、それ

が「国語」内部を構成するためいかに必須の「他者」であったかを明らかにした点で新たな視座を構築するものであった。また、『古事記』本文中の「訓読体」言語の事後性」の剔抉、あるいは荻生徂徠の批判をてこに訓読を「イデオロギー」としてとらえる視点、訓読の思想性を論じた箇所等、本書の議論も、新鮮な問題提起であったと言えよう。まさに、漢字、漢文に対する「思想史」研究が初めて出現したと言えるだろう。

3 近代「知」の枠組みに向けられた「問い」と、漢字、漢文、訓読

上に述べた、思想潮流としての近代批判、国民国家論の視線は、近代の「学知」の内省へ、そして教育制度や教育の思想への内省へと反省的視点にも波及することとなった。現代の教育文化の抱える難題が、近代国家の成り立ちへの内省と共に振り返られる中で、学問や教育の制度、さらには「学び」そのものの近代的特殊性が問われるようになったのである。そしてそのなかで、江戸期の教育、漢文訓読の手法にもまた、あらためて照明が当てられることになった。素読や音読の習慣といった、近代以降見失われた「身体的な知」の習得に新たな意味が与えられることになったのである。辻本雅史『「学び」

の復権——模倣と習熟』（角川書店、一九九九年）は、江戸時代の手習い塾における学習過程、儒学の学習過程のなかに、現代の「教え込み型」の教育とは異なる「滲み込み型」の教育の原型を探り、それを江戸時代の漢文の学び方、端的には、貝原益軒の教訓書や、寺小屋における素読の習慣のなかに見いだそうとするものであった。辻本はまた、近著『思想と教育のメディア史——近世日本の知の伝達』（ベリかん社、二〇一一年）において、そうした身体的な「知」の習得を、大きく「知」の伝達の技法、そしてメディア論の文脈の中で捉え直すことを説いている。そしてそうした視線の先に、江戸期日本の漢文学習、素読の習慣をインドネシアやアラビアの経典学習、教育文化と対照させつつ考えようとする試みもなされるに至った（山本正身編『アジアにおける「知の伝達」の伝統と系譜』（慶應義塾大学言語文化研究所、二〇二二年）。儒教の経典を学ぶ手法、素読など江戸期の学習文化が、イスラム世界の経典（クルアーン）学習過程と対照されるというのは今まで無かった試みであり、今後こうした研究から生み出される視点にも注目したい。

一方、近代の「知」の内実を問い直すという課題に応答するかたちで、大学の「国語・国文学・漢文学」授業担当者が、日本文学、日本語学の枠を内部から組み替え

ようとしたのが、東京大学教養学部国文・漢文学部会編『古典日本語の世界——漢字がつくる日本』（東京大学出版会、二〇〇七年）、及びその続編『古典日本語の世界』二——文字とことばのダイナミクス』（同、二〇一一年）である。二つの論集で提起されたことがらは多岐にわたるが、前者の副題につけられた「漢字がつくる日本」ということは、あるいは帯に記された「漢字のなかに生きたわたしたち」という表現が、新たな分析視角の発生を物語っている。同書編者の一人（神野志隆光）は、前著「はしがき」のなかで、近代以降の国語教育が「和文」偏重であったことの意味を問い直し、「いまもわたしたちを規制している、古代からあり続けた固有の民族」「日本語」による文学、という「古文」観は、近代国家のイデオロギーが成り立たせたもの」にほかならないとし、近代の知的制度の束縛を脱して「読み書きの世界の実際に即してみても、古典の世界の認識を作り直していきたい」と述べる。その結果として、日本古典世界が漢文世界としてあらためて見いだされたということなのであろう。「中国語としての漢字ではなく、「日本語としての漢字」を知るための」初めての辞典として、『新潮日本語漢字辞典』が発刊されたのも同年（二〇〇七年）のことであった。これは、新たな真の「日本」探しではなく、日本イ

デオロギーを構築した近代の知的制度から解放された、分析の視座を求める動きであり、その過程で日本文化、日本思想の「内なる」漢字、漢文に、元来文化複合的に構成された「日本」に、新たに照明が当てられたというべきであろう。

そうした視線を共有して、近代日本の文体成立過程を、翻訳、翻案、漢文といったキーワードによって解明した先鋭的研究が、齋藤希史による『漢文脈の近代——清末明治の文学圏』（名古屋大学出版会、二〇〇五年）、『漢文脈と近代日本——もう一つのことばの世界』（NHKブックス、二〇〇七年）である。「漢文脈」ということは齋藤によれば「東アジアにおける地域の諸語を超えて展開した」言語現象、「近代以前の中国を起点に東アジア全体に流通した漢字による文語文」としての「漢文」を「原点として展開したエクリチュール——書かれたことば——の圏域」を語るための試みのことば（枠組み）であった。そうすることによって「清末明治の文学圏」という分析の試みを提示することが可能となったのである（後者『漢文脈と近代日本』においては、近代日本の「漢文脈」を文体から「思考」のレベルにまで下ろし、「漢文脈」を構成した「士人」エリートスにも踏み込んでいる）。こうした齋藤の議論も重要な契機となつて、「翻訳」「翻案」等をキ

ワードに、東アジア近代の多様なありかたを、漢字、漢文を重要な要素とする一つの「圏」(方法的枠組み)として考える動きが出てきたのである。

4 東アジアⅡ漢文世界の形成という

視野の中で考える

以上述べてきたような経緯と並行して、分析の視野を東アジア世界に広げて議論を提示したのが、雑誌『文学』の二つの特集(二〇〇五年十一月、十二月号「東アジア—漢文文化圏を読み直す」、二〇一一年五月、六月号「言語資源としての日本語」)であり、中村春作・市來津由彦・田尻祐一郎・前田勉共編の『訓読論——東アジア漢文世界と日本語』(勉誠出版、二〇〇八年、同編『続「訓読」論——東アジア漢文世界の形成』(同、二〇一〇年)である。『文学』特集の前者では、金文京の「漢文文化圏」という枠組みに依拠して、言語(訓読と翻訳)、歴史(鎖国論の解体)、文学(資料学の国際化)、思想(アジアの自己認識)といったさまざまなことが論じられようとしている。巻頭の座談会で歴史学者、荒野泰典は「地域が先験的にあるのではなくて、あることを認識しようとしたときに、それに対応してさまざまな地域がつくられる、あるいは発見される。したがって、それは人によって違い、時代によって

変容していくものである。東アジアというものもそういうものとして見る必要がある」と述べているが、同特集にいう「漢文文化圏」もまさにそうした方法概念としてとらえられるべきものであろう。『文学』特集後者の「言語資源としての日本語」という言い方もまた、日本語を固有の分析体系に依拠して説明するのではなく、また、言語と話し手とを一体のものとして見るのではなく(すなわち国語Ⅱ国民という視野を脱して)、「選択可能な価値の体系」(金水敏)と見て、その選択、交差の歴史的なありようを問い直そうとするものであった。

日本語においてそうした課題を考えることは、金水も「特集」で言うように、当然、漢文、翻訳、訓読といった問題群につながる。そしてそれは日本以外の東アジア諸地域の言語・思想・文化と共に考えられるべきことがらともなる。その課題を、思想史の場面で捉え直そうとしたのが、前掲の共同研究『訓読論 および『続「訓読」論』である。両書は、中国学、日本思想史学、日本語学など多様な観点から、そして、朝鮮、琉球、長崎、ベトナムの言語文化形成を対照させて、「訓読」という手法から東アジアにおける文化交渉のあり方を問い直す新たな試みとすることができている。そしてそれは、方法として、「中国」世界をも固有性の議論から解き放ち、

多様性を有する漢文文化形成の場面で、日本も含む「東アジア」なるものが構成されたとする視点から、日本思想史の読み直しを試みようとするものであると言えるだろう。

漢文テキストは東アジア世界に拡散し、相異なる「読み方」を形成し、それぞれの思考言語を構成した。それら運動の集積を「東アジア世界」として捉え直すことが可能ならば、将来、儒学における朱子学対反朱子学（古学）に止まらず、近世日本の国学もふくめて、さらには仏教、神道等の經典形成過程も見通して、「漢文文化Ⅱ東アジア」という枠組みの定義を図ることが可能になるのかもしれない。

いささか話が大きくなりすぎた。最後に、眼前の個別の問題を記して稿を終えることとしたい。訓読研究をどう思想史研究に展開させるかという問題についてである。いうまでもなく、訓点、訓読は、日本において国語学の領域で長い研究の蓄積がなされてきた。そしてその中から、たとえば小林芳規の角筆研究のように朝鮮半島から東アジア地域に視点を広げた研究も出てきた。中国文学者、金文京の『漢文と東アジア』（前掲）も、訓読の起源を朝鮮、ウイグル、契丹における仏典解釈の場面に求めようとするものである。また、五山の研究を中心に、書

誌学領域でもこれまで多く、訓読への言及がなされてきた（川瀬一馬など）。しかしながら、隣接領域におけるこうした着実な実証研究の成果と日本思想史研究との間には、学問的交渉がこれまでほぼ無かったのが現実のようである（これもまた、近代の「学知」の問題であろうか）。たとえば近年の訓読史研究を代表するであろう、齋藤文俊『漢文訓読と近代日本語の形成』（勉誠出版、二〇一一年）で展開された江戸期訓読法の実相と、江戸期儒学思想研究をリンクさせることで、新たな思想史理解の可能性も出て来るのではないだろうか。そうした個別の地点からの議論の積み重ねを経ることで、大きな思想史の枠組みに、少しずつ接近することが可能になるのであろう。

（広島大学教授）